

# 霊宝館だより

霊宝館だより 第81号

平成18年11月20日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

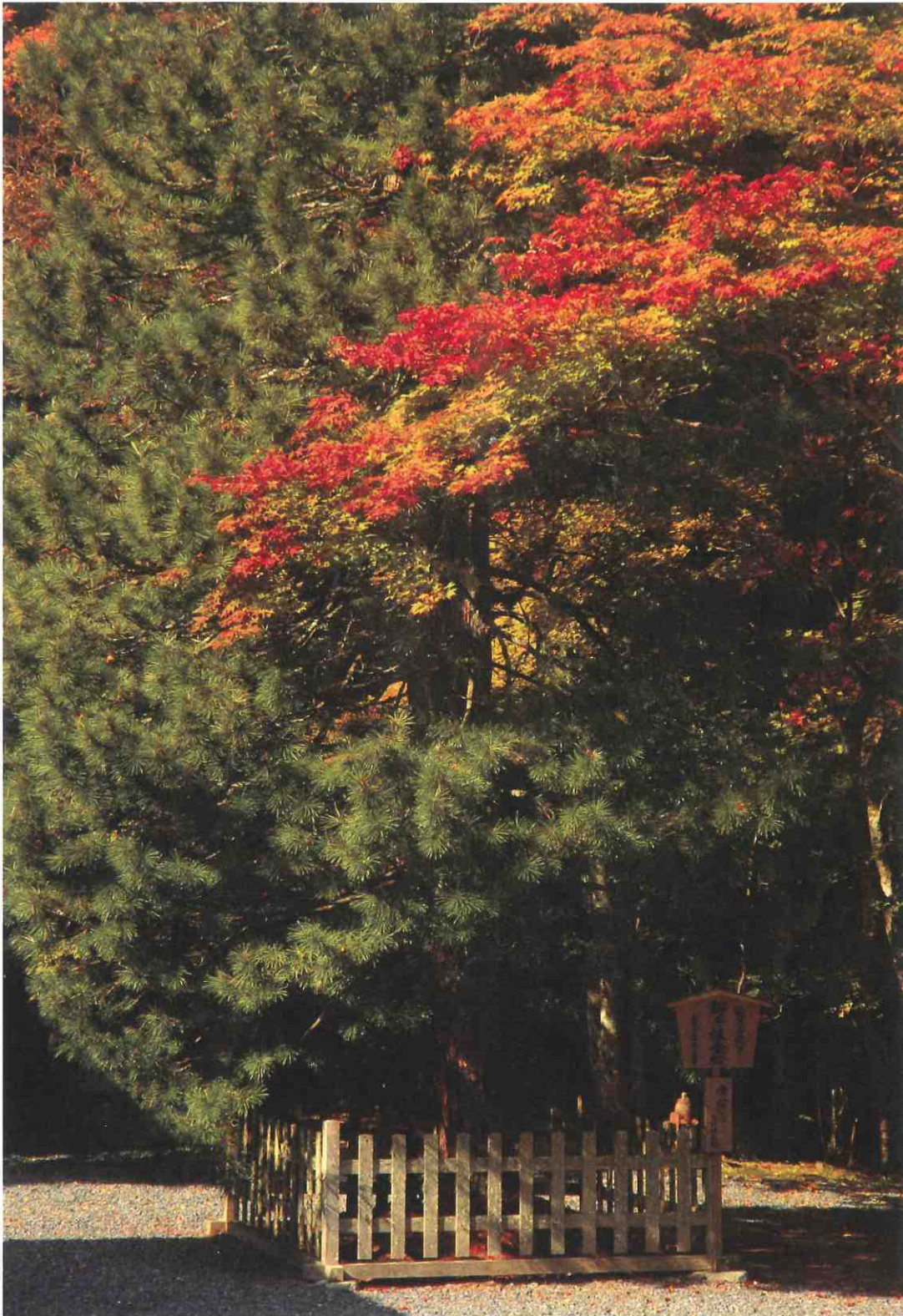
電話0736-56-2029

<http://www.reihokan.or.jp>

秋期企画展開催中

「寺院の漆工芸術」

9月23日(土)～12月10日(日)



秩父宮殿下御手植金松（コウヤマキ）

大正12年（1923）、当時の<sup>やすひと</sup>雍仁親王（大正天皇第二皇子）、後の秩父宮殿下が霊宝館境内にお手植えになった高野槇です。83年前の植樹の際は1メートルにも満たない可愛らしい高野槇でしたが、過去、幾度かの台風にも堪え、現在ではずいぶんと立派に、そしてまっすぐに成長いたしました。

先般、秋篠宮<sup>ひさひと</sup>悠仁親王さまのお印が「高野槇」と決まりましたおり、普段見慣れているお手植えの高野槇が、青天に向かって誇らしげに伸びていました。

企画展

「寺院の漆工芸術」

平成18年9月23日(土)～12月10日(日)

うるしは、ウルシノキから採取された樹液すなわち天然の材料です。日本では古く縄文時代から塗料あるいは接着剤として使われてきました。その塗膜は耐久性、耐薬品性（酸やアルカリに強い）に優れ、優美な肌合いと独特の情感を持っています。

奈良時代当時行われていた基本的な塗漆の方法は現在とあまり違いがなく、少なくとも、この頃、すでに漆を塗る技術が確立していたと思われます。平安時代には、蒔絵、沈金、螺鈿などの加飾による技法も確立し、それとともに多種、多様な意匠が生み出されてきました。

寺院においても仏殿の荘厳品や経箱などには、螺鈿による加飾が用いられ尊ばれてきました。又、寺院で使用される日常生活用品にも漆器が用いられるようになり、高野山で使用された漆器の多くは朱塗りで、後に根来塗と呼ばれるようになりました。

本企画展では、加飾技法された漆工、根来塗、琉球漆器など寺院所有の漆工芸品を展示致します。



秘密灌頂箱



食籠



文庫

◆主な出陳品

- 重文 秘密灌頂箱 龍光院
- 重文 厨子入俱利伽羅龍劍 龍光院
- 重文 板彫胎藏曼荼羅厨子 金剛峯寺
- 重文 厨子入金銅水神像 金剛峯寺
- 重文 板彫西界曼荼羅厨子 金剛峯寺
- 未指定 蒔絵手筆筒 金剛峯寺
- 未指定 (根来) 香合 金剛峯寺
- 未指定 三葵梅花蒔絵椀 金剛峯寺
- 未指定 螺鈿蒔絵菊花硯箱 金剛峯寺
- 未指定 螺鈿蒔絵菊花文函 金剛峯寺
- 未指定 梨子地金銀唐草御紋散御広蓋 金剛峯寺
- 未指定 梨子地金銀唐草御紋散御文箱 金剛峯寺
- 未指定 梨子地金銀唐草御紋散御料紙箱 金剛峯寺
- 未指定 黒地羯磨文金蒔絵箱 金剛峯寺
- 未指定 春日厨子曼荼羅 金剛峯寺
- 未指定 佛舍利納入箱 金剛峯寺
- 未指定 唐櫃 金剛峯寺
- 未指定 行厨 宝寿院
- 未指定 和鏡箱 宝寿院
- 未指定 梨地武田菱紋蒔絵書状箱 成慶院
- 未指定 采配串 成慶院
- 未指定 食籠 正智院
- 未指定 硯屏風 正智院
- 未指定 文庫 正智院
- 未指定 椀 正智院
- 未指定 根来塗盤 不動院
- 未指定 雲切五銚箱 宝寿院
- 未指定 青銅龍王像箱 金剛峯寺

収蔵品の紹介 55

かすがずしまんだら  
春日厨子曼茶羅

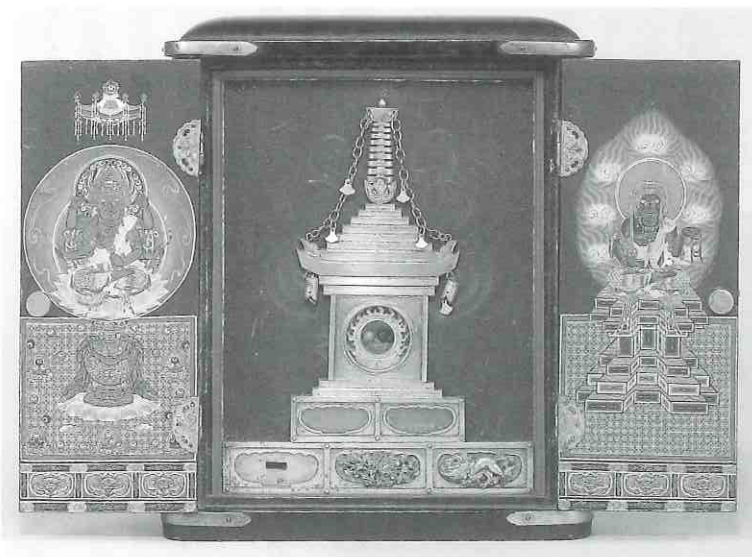
総高18.2cm 横15.5cm

室町時代 14-16世紀

金剛峯寺



(表面)



(裏面)

本品は仏舍利を納める黒漆塗厨子である。比較的小さな厨子ではあるが、表裏両面にそれぞれ扉を設けて開閉できるようになっている。表面の中央には春日鹿曼茶羅図が描かれる。屈肢して坐す神鹿の鞍より一本の「ヒモロギ」と呼ばれる春日明神を象徴する榊の枝が立っており、続いて大円相が表現されている。中央に釈迦如来、その周囲に、下から時計回りに薬師如来、十一面観音、文殊菩薩、地藏菩薩を曼茶羅形式に配し春日明神の本地仏を表している。

さらにその上方には春日大社の山景である御蓋山を日輪とともにそえ、左右扉内面には各二尊ずつ春日明神を守護すべく四天王像が描かれている。裏面は金銅製の宝篋印塔を造りつけ、その中心に舍利を数粒奉籠する。左右扉の内面、向かって右には、不動明王像、左に愛染明王像を描いている。我が国における舍利信仰は平安時代から鎌倉時代にかけて隆盛をみた。また春日信仰も神仏習合思想によつて舍利信仰とほぼ同じ時期に隆

盛し、多くの春日曼茶羅などの垂迹画が制作された。仏舍利は釈迦の遺身であり、春日明神の本地は釈迦如来であることから釈迦如来を本尊として、舍利信仰と春日信仰という、一見異なった二つの信仰形態を一つの厨子に収めていることがわかり、また高野山と春日大社、興福寺との関連をも示す遺例として貴重である。諸尊の明澄な色づかいなどから室町期の制作になるものと思われる。

## 連載

## 高野山の名鐘

## 其の4

## 金剛峯寺 六時の鐘

霊宝館副館長 井筒 信隆



## 永久に響きわたる鐘

金剛峯寺の門前から壇上伽藍に通じる道の右手に築かれた、高い石垣の上に設けられる鐘楼に「六時の鐘」と俗称される梵鐘が吊られている。この梵鐘について、坪井良平氏はその著『高野山の梵鐘』

において、以下のように述べられている。

元和三年（一六一七）福島正則が父母追善を目的として、二六時を報ずる鐘を鑄造することを計画し、翌四年に完成し高野山に寄進されたものである。しかし、寛永七年（一六三〇）十月火災にかかり、正則の子である正利が父の志をついで、寛永十二年（一六三五）に再鑄をしたものである。

梵鐘の姿は、一般によくみかける姿のものであるが、梵鐘最下部の駒の爪と呼ばれる部分に、基石を半分に切ったような円形の極めて低い突起が五個ずつ並べられて鑄出されている点が、この鐘の特徴である。このような裝飾手法のみられる梵鐘は、備後三原の鑄工によって鑄造された梵鐘にみられるものであると指摘され、同裝飾手法のみられる梵鐘例として、○山口県豊浦郡豊北町の海翁寺に伝わる天正六年（一五七八）在銘の



元芸州満願寺鐘、○三原市妙正寺に伝わる天正八年（一五八〇）在銘の元三原寺鐘、○広島県沼隅郡沼隅町（現福山市沼隅町）光照寺の慶長十八年（一六一三）在銘鐘の三例が紹介され、それらの梵鐘には備州三原の住人で、竹原屋吉井彦左衛門尉信正の鑄工を伝える

銘があることを合わせて報告されている。

また坪井氏は、この特異な装飾手法は他の国の鋳物師の作品にみられないものであるとし、恐らく、福島正則は梵鐘の鋳造にあたって領地にあった三原の鋳工に発注し、さらに寛永十二年（一六三五）の正利による再鋳奉納の鋳造にあたって、同じ三原の鋳工に鋳させたことから、その独特の意匠が継承されたものと結論づけておられる。

この「六時の鐘」に刻されている仮名交じりの銘文は著名であるので、福島正則の奉納銘文を紹介しておきたい。



「南山高野金剛峯寺は大師草創より此かた、密教さかりにして一糸台も違易あえず、今に儼然たり、然るに此山中に洪鐘ありといへども、二六時を報する声なし、衆徒是を蹉嘆すること久し、爰に尾州海東の生縁福島正則、勝を千里に對し、治を大邦にやすんず、故に備芸の二州を領す、外に仁義を施し、内孝養を旨とするによりて、先考の父慈愛の母追善のために、治工を招きて新たに華鐘を鋳て、彼山に寄附す、加之三箇の淨人に命じて、時々響音にたふることなからしむ。凡其功德、是を撃ては一切の悪道、頓に停止を得、是を聞けは十方の聖衆、来て共同を

利す、乞願ふ所は、此力によりて諸の衆生、現当二世安楽ならしめんと也 元和第四戊午曆二月六日」との銘文が池の間に陰刻されている。この銘文に続いて、福島正利が寛永十二年に再鋳し奉納した時の銘がある。

「六時の鐘」が吊られる檜皮葺の美しい姿をみせる鐘楼は、『紀伊統風土記』によると天保六年（一八三五）に再建されたものである。「六時の鐘」は、奇数時に撞かれる「大塔の鐘」とともに、午前六時から午後十時までの偶数時に、時を知らせる時報の用途も加味して撞かれる「時の鐘」でもある。かつて、日本の各地で時刻を伝えていた「時の鐘」の風習が徐々になくなり消え去ろうとする現状にあつて、かろうじて、高野山にその伝統が生きていることは誠に貴重な文化の継承であり、世界文化遺産の高野山の地に永久に時の鐘の響きわたることを念じてやまないものである。

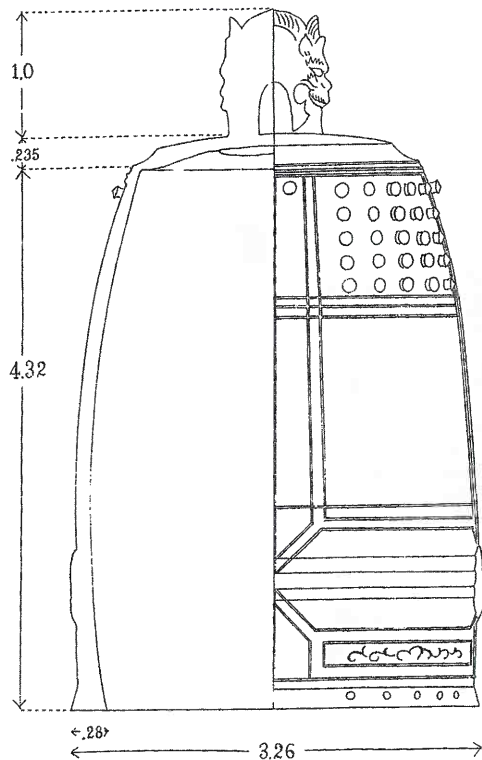
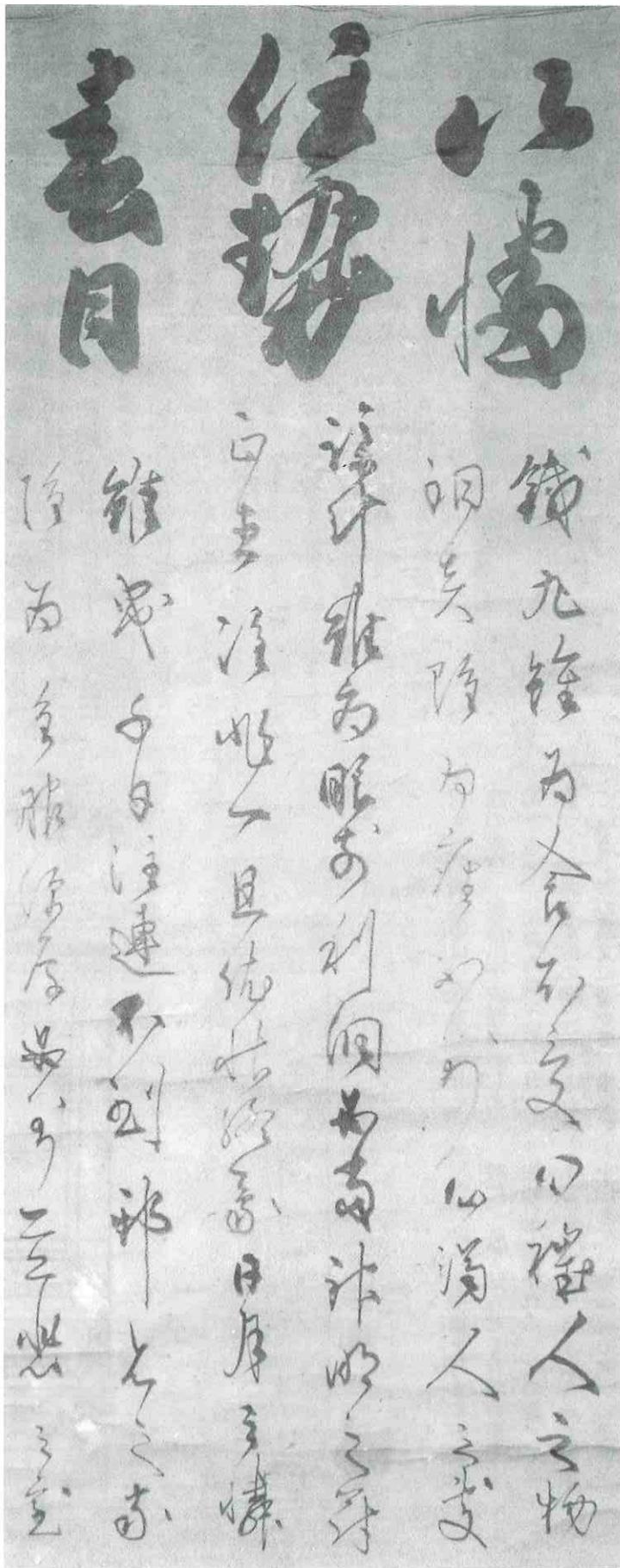


図6.8.6 単位:尺

高野山の文化

(一) 巡寺八幡について

奥之院維那 日野西 眞定



三社託宣 一幅 有志八幡講十八箇院

三社託宣

後陽成院様御真筆

惣分一箇

三社託宣軸裏銘



「御三社迎」の図（『紀伊国名所図会』）

霊宝館から同館発行の「霊宝館だより」に、何か書けとの依頼があった。同館には前々から大変にお世話になつていたので、承諾をした。「高野山時報」には、「高野山の民俗」と題して連載をしているので、同館の持つ使命から「高野山の文化」と題して、違った面を紹介しようと考えた。

先ず（一）として「巡寺八幡について」を取り上げる。数年前から高野山の中でも旧行人方であった寺の住職方にその要望が強いので、これに応えたいと思つたのである。

## （一）三社の託宣について

### （1）霊宝館蔵軸について

高野山内及びその周辺には、「伊勢・春日・八幡三社の託宣」が多く見受けられる。このことについては『天野の文化と民俗』（二〇〇一年 第一号）に、それまで調査をした十六本をまとめて、小論を発表している。ところが今回、霊宝館に行人方の信仰の中心であった「巡寺八幡講」で祀られた軸が存在することを、同館の宮崎恵仁氏に教えられ、これを調査することが出来た。本軸は、高野山及びその周辺に存在する同系軸の中核的存在のものであることが分かった。

軸の表書きは、「八幡・伊勢・春日」と大字であり、その下に二

行に各尊の託宣が書かれているが、これは「八幡」の託宣中「銅炎」と書かれた系統のものである。詳しい文章は後で紹介する。

重要なことは、軸裏の記述で、三社託宣 後陽成院様御真筆 惣分一臈坊 とある。

『紀伊統風土記』（五・八三～四頁）の「巡寺八幡宮」によると、「八幡宮御鎮座の寺院を一臈坊といふ」とある。江戸時代には行人方上通の三十ヶ院を二月七日・七月二十日の半年毎に、巡寺（祀る寺を移動）しているが、巡寺八幡の御神体を次に「一臈坊」になる寺に移す前夜、先ずこの軸を箱に入れて運んでいる。これを「御三社迎といふ」とあり、「一臈坊」では、この両者を並べてお祀りするとある。この二つが行人方の信仰のシンボルであったことが分かる。またこの軸について、「後陽成帝の宸筆なり、神前の額又同帝の献じ給ふ所なり」とあり、軸裏の記述とも一致し、御筆の額もあったことが分かる。

このことにより、三社の託宣は、巡寺八幡社とともに、行人方の信仰上重要な存在であったことが分かると同時に、高野山内及び周辺

地域で、この軸が各種の講や行事で用いられているなどを解くことが出来たのである。

### （2）軸の所在と種類

（ア）軸の所在  
今までに、私の手元に集まっている軸の写真は十六枚である。それに平成十二年十一月刊『京都古書組合総合目録』に二点「三所神福」と名付けて売り出していたので、これも参考にする。

先ず十七本の軸の所在地を地区別にと、次のようになる。すべて和歌山県伊都郡内で、高野町八（高野山四・東細川二・西富貴二）、九度山町七（慈尊院三・丹生川二・黒河一・入郷二）、かつらぎ町天野一、花園一である。

### （イ）軸面の構成

次に内容を分析すると次のようになる。なお、各軸の所在地・所有者名を記さなければならぬが、所在地名を記しているのは、その講の所有である。個人名の場合、その講がなくなり、個人が預かっているケースが多い。別に、明らかに個人所有のものもある。個人が預かっているものは、その名前を括弧に入れておく。



① 高野山山陰家旧蔵

## (二) 軸面の構成

### (1) 三神像と三社の託宣

① 高野山山陰家旧蔵。(現愛知県北設楽郡本田一郎代氏所蔵) 上部三神の中央、天照皇太神宮は雨宝童子形。伊勢講でも、本尊をこの童子形に描く場合が多い。伊勢神宮の奥の院といわれる、その後



② 天野神田地区所蔵

方の山頂にある金剛証寺の雨宝童子をシンボル化したものと思われる。この信仰の伝藩には、僧侶の介在が考えられる。脇の八幡菩薩・春日明神は衣冠姿で、八幡菩薩は馬に乗り弓を背負う。春日明神は鹿に乗る。上に日月天を描く。託宣の文句も短く、これが元のものかと推察される。室町時代のもので資料的価値は高い。旧蔵の山陰家を先に書くのは、これがもと高野山の寺で使われていたのを同家が入手したと考えられるからである。

② 天野神田地区所蔵。上段三神は、皇太神は雨宝童子形、左春日、右八幡両菩薩は衣冠束帯の立像。各々弓、槍を持つ。専門の絵師により描かれる。軸としても良品で、

江戸時代のもの。以下、殆ど同時代のもので、時代を記さないのはこの時代のものである。

③ 西富貴(扇本武氏所蔵)。上部三神像は木版刷りで、像容は、天照は②と同一、八幡は②とほぼ同一だが座像である。春日明神は中国風の服装で、冠に龍が載っている姿で座像である。託宣の最後に「奉拜書沙門觀山」とある。この紙を持参して僧侶に託宣を書かせたものと思われる。

### (2) 三神名と三社の託宣

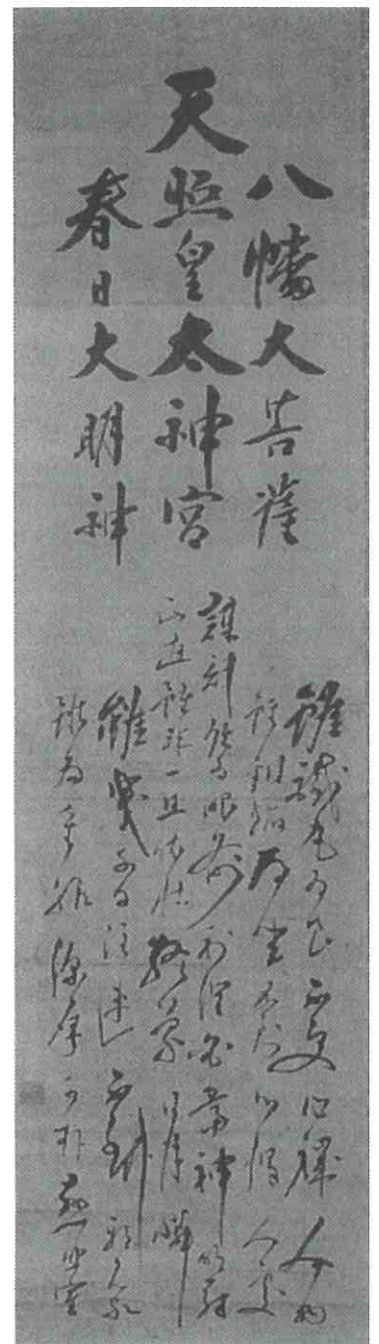
中央に天照皇太神、向かって右脇八幡大菩薩、左脇春日大明神と墨書する。④高野山無量光院所蔵、⑤東細川地区日待講所蔵、⑥西富貴(扇本氏所蔵)、⑦新子(尾上角兵衛氏所蔵)、⑧黒河(福井貴雄氏所蔵)、⑨慈尊院安賀箱日待講所蔵、⑩同西箱同講所蔵、⑪同中箱同講所蔵、⑫入郷地区所蔵、以上九点全て江戸時代のもの。同時代にはこの形式が一般化している。ただし、託宣の文句は室町時代のものより長くなっている。⑬巡寺八幡講所蔵もこの中に加えられる。但し神名は八幡・伊勢・春日とある。





⑭ 親王院所蔵  
三神と弘法大師・高野明神合流の図

(3) 三神像と高野明神・弘法大師像  
⑭ 高野山親王院所蔵。上段三神像は②と同一で、上部に日月天を描く。下部は高野明神と弘法大師が立ち並ぶ。高野明神は白色の衣冠束帯姿の所謂明神形である。軸裏に「親王院堯榮修補」とある。他に「三種神器」の軸がある。仏教化した神器像であるが、軸裏に「明治壬子年杳月親王院堯榮之レ



⑤ 東細川地区所蔵

ヲ寛ム」とある。明治壬子年は同四十五年(一九二二)である。この時に、正月用のこれらの軸を水原堯榮師が求め、三神像も補修したと思われる。この軸は、それまでに親王院に所蔵され、正月には土室に祀られていた。江戸時代には高野山で、三神信仰に高野山の信仰を合流させるといふ動きがあったのである。このことから、三神は日本の神々の代表的存在として扱われていたことが分かる。

(4) 三神名と三神像

託宣とかかわりはないが、三神名と三神像を組み合わせた軸がある。神名も天照皇大神・八幡大神・春日大神と神号に変えられている。明治時代以降のものである。像容も、皇大神は女神像となり、八幡は変わらぬが、春日の採物が、

槍が神木(神カ)の枝になり、背中の襟に差し込んでいる。中段に天照皇大神の由緒書が入っている。

⑮ 丹生川地区、⑯ 東細川新谷喜代子氏所蔵で、全く同じもの。⑰ 丹生川和田家所蔵のものは由緒書がない。三神信仰が今でも生きていることを示す資料である。

以上であるが、これらをまとめると、先ず、(1)「三神像と三社の託宣」があつて、江戸時代になると、この流れは僅かとなり、主流として、(2)「三神名と三社の託宣」となる。そして明治時代以後は、(4)「三神名と三神像」となっている。別に、(3)「三神像と高野明神・弘法大師像」という高野山の信仰を加えた軸も江戸時代には生まれている。

つづく

# 奥之院頌徳殿 (茶処)

しょうとくでん



頌徳殿全景  
大正3年（1914）頃完成。手前左は御供所の門です。

奥之院御供所の南側には、通称「茶処」と呼ばれる参拝者用の休憩所があります。建物の内部はやや湿気を含んでいて、旧家の土間のようにです。太い丸木柱や天井部に組み合わされる梁など、簡素な造りながらも、装飾性をも兼ね備えた随分と立派な建物であることがわかります。

ところで、茶処の正式名称は「頌徳殿」というそうです。なるほど、建物の正面には頌徳殿と書

かれた大きな扇形の木額が掲げられています。頌徳という語を国語辞典でひきますと、「功績・徳行をほめたたえること」とあります。

頌徳殿は大正四年（一九一五）、高野山開創千百年の記念事業として新築された建物の一つで、高野山でも少なくなりつつある大正時代初期の建造物です。

頌徳という意味の通り、頌徳殿は有志の寄付によって造営されました。記録によると、和歌山市萬精院と常住院両住職の発起になるもので、同市、三宅代三郎、宮井宗兵衛、三村栄吉、室安太郎、前田辰之助、橘吉右衛門、それに大阪市の高倉藤平、松井伊助、加納安蔵、本山彦一など、明治から大正期における実業家や名士が中心となって建設費用が援助されたことがわかります。さらに頌徳殿内部には「頌徳殿建築寄附芳名録」と記された額があつて、そこには多くの寄付者の名前も掲げられて



頌徳殿内部  
平成7年頃内部の美装工事が施され、随分と明るく綺麗になりました。



正面扇形扁額「頌徳殿 座主有範謹書」  
第385世密門有範（1843～1920）金剛峯寺座主の書になる頌徳殿額字。下段には施主大阪加納安蔵とあります。



「頌徳殿」額字  
縦87.0cm横170.0cm  
頌徳殿内部に掲げられていた徳川頼倫の書で絹に墨書されています。頼倫は明治5年生。和歌山藩主徳川茂承の家督を継ぎ、南葵文庫を創設し日本図書館協会総裁をつとめました。大正14年没。  
本額字は平成7年に取り外され、現在霊宝館で保管しています。

います。

建物は桁行十間、梁行五間で建坪は五十坪。平屋造りで、正面上方には破風と呼ばれる大きく張りだした屋根を持ち、部材は総檜造りで屋根は当初檜皮葺でした。現在では銅板に葺き替えられています。

大正二年（一九一三）頃、頌徳殿建設の話聞いて、その内部に弘法大師の一代記「大師行状図画」の額絵を奉納しようとした人がありました。それは東京高輪在住の細川糸子という方で、大正三年四月二十五日、画師を伴って高野山に登山し、頌徳殿に掲げる大師行状図画の寄付を約束されました。

細川糸子氏は、明治から大正時代にあつて、相当に財力のある女性だったようです。大正三年五月十八日、奥之院御廟橋を渡った左手に墓石を建立した時などは、所縁坊である清浄心院において三百人もの大衆を招待して大供養会を催したということです。信仰心が篤く、財施の行を実践された方であつたことがわかります。

明治時代から昭和にかけて、浄土宗には布施行者で、隠れた慈善

家としても知られた颯田本真尼（二八四五〜一九二八）という有名な尼僧さんがおられました。この本真尼さんの説教所（慈教庵）の建設用地として、藤沢市鶴沼にあつた五百坪の敷地をボンと差し出したのは東京の細川糸子という信者さんでした。このことは『颯田本真尼の生涯』（藤吉慈海著）という伝記本に記されており、確証はありませんが、同じ細川糸子という名前などからも同一人物である可能性も考えられます。

さて、こうして頌徳殿に掲げら

れることになつた大師行状図画は、東京の仏画師、松下尚悦、尚信親子が担当し、大正五年四月十六日に合計二十六枚が描かれました。ところが頌徳殿に掲げるには保存上よろしくないということになり、同じ時期に建てられた大師教会講堂内部に掲げられることとなり、現在に至っています。（M）

細川糸子さんについて調べるに当たり、清浄心院様にご配慮いただきました。記して感謝申し上げます。



高野大師行状図画 「高野山御開創」場面  
東京在住の画師である松下尚悦（1875〜？）、尚信両画伯によって描かれ、大正5年4月16日に合計26枚が奉納されました。施主は細川糸子、図案指導者は富田明次郎、発願者花谷理剛、所縁坊は清浄心院と記録されています。



松下尚悦画楊柳観音像  
東京の細川糸子氏は、奥之院頌徳殿に高野大師行状図画を寄付する目的で、大正3年4月25日、松下尚悦、尚信画伯親子を伴って登山し、その折、本図が金剛峯寺へ奉納されました。また清浄心院へは宝冠阿弥陀如来像が奉納されました。



大正〜昭和頃の頌徳殿 篠原行雄氏所蔵絵ハガキより  
建物の周囲には奉納額が掲げられています。これらは現在もあつて、中央入口左上の額絵は大正11年10月10日に奉納されたもので、靈驗譚の内容が描かれています。また明治45年の通夜御廟参詣百日間記念額や武運長久（明治39年）などという勇ましい額も掲げられています。

時事

「高野山の名宝」展終了」

七月十六日～九月十八日まで高野山霊宝館において開催の「高野山の名宝」展が一万七千人の拝観者を迎えて無事終了した。

「空海マンダラ弘法大師と高野山」展終了」

九月九日～十月二十二日まで北海道立旭川美術館において開催の「空海マンダラ」展が、三万人の拝観者を迎えて無事終了した。

霊宝館販売品のご案内

霊宝館では、現在100種近くの商品を取扱しております。霊宝館売店での販売の他、ホームページ、電話からのご注文も頂けます。今回、新しく孔雀明王像のクリアファイル



クリアファイル 孔雀明王像

アファイルを作りました。■クリアファイル 孔雀明王像

¥400



霊宝館紅葉

霊宝館庭園は、十種を越えるモミジが多数植栽されており、高野山の名所として知られている。

紅葉の見頃は十一月初旬～中旬頃。



紫雲放光

奥之院維那日野西眞定師より、「高野山の文化」についての玉稿を頂戴しました。近世高野山の伝統に深い関わりを持ちながらも、世に余り知られていない資料などをご紹介し、記録していけるものと思います。(M)

約四十五年前に建てられた収蔵庫には、今では全く使用されなくなった数台の古びたロッカーがあります。その内の一つにはホコリをかぶった雑書類が詰まっていて、先日、この中から二冊の大学ノートを見つけました。昭和四十年当時、霊宝館では収蔵されたばかりの膨大な古文書の調査と整理が進められていました。そのノートには、古文書調査中に知り得た重要な部分が抜き書きされていました。ノートの持ち主は昭和五十年に急逝され、高野山の近世文書に関する膨大な知識は、直接後輩へと受け継がれることはありませんでした。

拝観時間の変更と利用案内

開館時間(平成18年度から次記のとおり変更されました)

■5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■11月1日～4月30日

8時30分～16時30分

■休館日 年末年始のみ

■拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円